

縄文人をどのように描いてきたのか

安芸 早穂子

これは私が初めて描いた縄文人の復元イメージです（Fig. 2.2.1）。本日お越しの小山先生と出会って最初に描いた縄文人像です。実はオーストラリア・アボリジニの家族写真を縄文人に置き換えたのですが、なんとほぼ全員が裸でした。後に再版された時に表紙は替えたのですが、初版はこのようなものです。これは、とりもなおさず、私の中で縄文人のイメージがまだまだ貧困であったことを物語っていると思います。

こちらはその15年後、同じシリーズが再版されたときに描き直した表紙で（Fig. 2.2.2）、がっちりと全員が服を着込んでいます。これらの衣装は、それぞれ裏付けをもって復元されたものです。

というわけで、初版と再版の15年の間に、私の中の縄文人のイメージがどのように豊かになっていったか、というお話をこれからしていきたいと思います。

まず、復元イメージというものがどういう風に作られていくか、そのプロセスについてお話ししたいと思います。

復元イメージが使われる媒体としては、教



Fig. 2. 2. 1 「縄文人の家族生活」初版表紙



Fig. 2. 2. 2 「縄文人の家族生活」再版表紙

*下部にある註は吉田泰幸による

再版 週刊朝日百科『日本の歴史』の新訂増補版として2003年に発行されたバージョン。

初版 1986年に週刊朝日百科『日本の歴史』シリーズとして発行された同名タイトル。小山氏が言うようにコンテンツに大きな違いはない。



Fig. 2.2.3 復元イメージを描く安芸氏

科書、博物館の展示画、新聞、テレビのニュースなどがあります。

ここからは、縄文時代最大規模と言われる、青森県の三内丸山遺跡が発見された当時のお話をいたします。私が受けた仕事の中で、面白い例の一つだからです。

復元イメージの仕事に依頼されますと、最初に

空撮などの写真で、だいたいの環境などを把握し、位置を確認します。次に遺構配置図と呼ばれる図をいただき、遺跡全体の把握をします。次に遺跡の特徴などを示す写真をいただき、どういう特徴がある遺跡なのかといったことを把握します。

三内丸山の場合は、たくさんの土器が埋もれた人工の丘と、なんといっても六本柱の柱が特徴です。発掘された穴の中に残っていた材木がクリの木であったという事で、ここには巨大なクリの柱が六本立っていたことがわかりました。しかし残念ながら、その先の事がわかりません。柱はどのような形状をしていたのか、何を支えていたのかなどは、考古学者の議論的になった訳です。

Fig. 2.2.3 は全国を巡回して三内丸山の発見を告げるために行われた「縄文まほろば博」という展覧会のために、うら若かった私が三内丸山遺跡の復元イメージを描いているところです。下に見えるように、六本柱は建設中という事になっておりました。ただ、この写真を撮る前日までは、六本柱に屋根がついていたのです。にも関わらず、ある晩、青森から電話がかかってきて、「屋根は取る事になりました。消してください」と、言われたのです。それは搬入のほぼ10日前のことで、私も大変慌てました。青森では六本柱の形について、県や考古学者の間で喧嘩腰の議論が起きていまして、結論が出なかったわけです。そして、窮余の策として「建設中」ということになったのです。このように復元イメージは、さまざまな要因で姿を変えます。この場合は、観光資源にしたい青森県、信念を曲げたくない考古学者、そして急いで決めてほしい展覧会実行委員という、この三者の間でどんでん返しが起きて、私はその真ん中で翻弄されたという形になりました (Fig. 2.2.4)。当時悔しそうに私に電話をかけてきた青森県の岡田康博先生は、今でも「この六本柱は建設中です」と言っておられます。これはほんの一例ですが、三内丸山遺跡ひとつをとっても、このよ

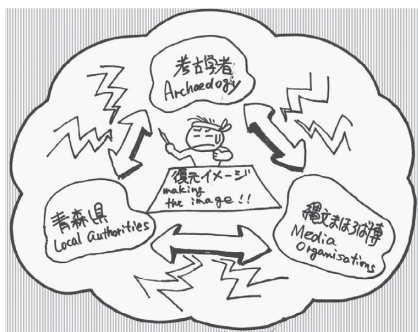


Fig. 2.2.4 復元イメージに関わるアクター

うにさまざまな復元イメージができます。

また、それが使われるメディアによっても、イメージの描き方は変わります。権威のあるサイエンスマガジンや教科書などで描く時は、特に細心の注意を払って監修を受け、一般的に受け入れられているイメージにします。それに対してテレビの場合などは、クローズアップなどにも

耐えるよう細部にも気を払わなければなりません。

さて、ここからは、私が描いてきた縄文時代の村のイメージに目を向けていきたいと思います。

私は学生時代にヨーロッパ中世にハマリまして、卒業してからバックパッカーになってヒッチハイクをしながら、ピレネーとかフランスとか、イタリアの古い村々をスケッチ旅行していました。思えばこれが、私と歴史的景観との本格的な出会いだったと思います。きっかけは芸術大学の日本画の教授が、ヨーロッパの景観とフレスコ画をスケッチしてまわるツアーをしていたことです。エプロンをした娘さんが豚を捌いてソーセージを作っている、というような中世の面影が色濃く残る村が、モダンな都市からほんの数時間のところにあることに私は衝撃を受けました。なにより家々の景観が風景と調和して、息をのむほど美しい。人間の暮らしと自然環境が美しく調和した風景を探すことに、私は強烈にハマったのだと思います。それはヨーロッパにとどまらず、世界中のあちこちの伝統的な故郷の景観でもありました。

定住をしていなかった縄文人の村の景観は、当然、西洋中世の村とは比べようがありませんが、湿潤な日本の風土にしっかりとそぐった縄文の集落とはどのようなものであったのか、といつも考えます。それは現代人が思いも寄らないほど、川の蛇行や山並み、天体の運行や季節風に注意や敬意を払った景観であったはずで、縄文時代の集落は、おそらく、遠くからは見つけられないほど風景に同化していただろうし、住まいの向きや並び方にも、彼らの思想や世界観が表れていたのではないかと思います。

Fig. 2.2.5 は、浅間縄文ミュージアムに描かせていただいた壁画で、浅間山麓の火山岩丘の台地にあった縄文集落の復元イメージです。石で囲った墓穴が出たという事で、火山とともに暮らす縄文人の死生観を表現しようと思いました。製作中には地元の人が、浅間山の景観、浅間山のこの稜線に対して、とてもう



Fig. 2. 2. 5 浅間山麓の縄文集落イメージ

るさい、こだわりがあることがわかりました。何度も描き直しをさせられたのですが、今でも土地の人にとっては、浅間山のような象徴的な火山の景観は、ふるさとのアイデンティティなのだと、痛感したのです。

さて、いよいよ村の中に入っていきたいのですが、この村と縄文人は、私が本当に生まれて初めて描いた復元イメージです (Fig. 2.2.6)。向こうの縄文集落は、違う意味で風景に埋没しています。監修者だった小山先生も、私も、このときにはまったく縄文時代のイメージがなくて、まさしく暗中模索でした。なので、縄文人はほぼシルエット、集落は向こうの台地の上にほとんど見えないように描いています。



Fig. 2. 2. 6 縄文の村復元イメージ 1

比べて、この村の様子は 15 年後に小学生向けの本のために描いた物です。同じく、小山先生は監修です (Fig. 2.2.7)。村には住居と倉庫がはっきり姿を現して、暮らしのイメージがずいぶん豊かになりました。

彼らの家に近づいてみます。竪穴住居と言っても、私が遺跡の発掘現場に出かけていってスケッチをするときは、穴だけです。現地では、む

浅間縄文ミュージアム 長野県北佐久郡御代田町の博物館。国重要文化財の川原田遺跡の中期土器などを展示している。作曲家・武満徹が御代田町

に居住していたことから、「武満徹 御代田の森のなかで」と題した特別展も開催されたことがある。



Fig. 2.2.7 縄文の村復元イメージ2



Fig. 2.2.8 縄文のホームライフ復元イメージ1



Fig. 2.2.9 縄文のホームライフ復元イメージ2

しろ水場となる川や林の地形や草花などをスケッチします。発掘調査をしている人に説明を受け、住居のサイズや形状などを確認すると、そこからは、穴に柱を建てて屋根で覆い、暮らしの道具を備えていろりに火を入れるのが私の仕事になります。

建物であるハウスの中に家族を描き入れるとホームになります。私はホームライフを描く事が大好きです。しかし、家も住人も、そのイメージを決めるのは私ではなく、監修する考古学者です。ということは、ここでも復元イメージはひとつではなく、研究者のイメージを反映して姿を変えます。Fig. 2.2.8は、元歴博の館長でいらした佐原眞先生の監修です。そしてFig. 2.2.9は小山先生の監修です。どちらも私が描いた絵ですが、各先生の研究成果と復元方針によって、このように違った縄文のホームライフになります。

ホームライフを描く事が好きといいましたが、生活するものの日常は長い歴史の中でもそう変わるものではありません。現代の都市に暮らすカラスは捨てられたハンガーを器用に再利用してホームにしています。使われる材料は格段にモダンになってもハウスの中のホームライフは変わる事がなく、家族が子どもを育てながら苦楽を共に暮らしているのです。今も昔も変わらない、人間の普遍的な暮らし方や心の風景をひとつのシーンとして挿入する事は、誰でも共感できるリアリティを復元イメージにもたらすことができるはずです。条件次第で移ろいゆく復元イメージの運命の中で、私が独自に発揮していける私の復

佐原眞（さはら・まこと） 弥生時代の研究者として著名の他、奈良文化財研究所や国立歴史民俗博物館（通称：歴博）の要職を歴任した。考古学

をわかりやすく伝えることをモットーとし、多数の著作がある。



Fig. 2. 2. 10 ゴールデンエイジオブ三内丸山

の絵ですが、群衆の迫力だけで当時の三内丸山集落の規模とパワーを表現しようとしたものです。

さてここからは、貧困だった私の縄文人像にポジティブで具体的なイメージを次々と与えていった小山先生を中心とするチームの、二つの民族学的なアプローチについて具体的な例を挙げて述べます。

一つ目、「行ってみる」という体験としてフィールドワークが与えるインパクトが、私が描く復元イメージにどのように表れていったかを、まずお話しします。Fig. 2.2.11 は諏訪大社に伝わる伝統的な七年に一度の大祭、御柱祭を取



Fig. 2. 2. 11 縄文の御柱祭 1

元イメージの特性は、その辺りにあるはずで

すが、デジタルの時代、動画や立体映像のリアリティも進歩が目覚ましいですが、シンプルな手書きの白黒の絵にある人間らしさの奥行きのようなものは、侮るべきではないと思います。Fig. 2.2.10 は「ゴールデンエイジオブ三内丸山」というタイトルの

材して描いた縄文時代の御柱祭です。

Fig. 2.2.12 には実際にこのワイルドな大祭典に行ってみた私の衝撃が表れています。ちょうど私のデビュー、週刊朝日百科の仕事があった年は、御柱祭のあった年で、小山チームと「木落とし」と呼ばれる祭りの最もワイルドなメインイベント取材に行きました。このときはまだ、三内丸山は発見されていませんでしたが、小山先生の頭には、大木を山から切り出して引いてくるイベント自体が祭りだというイメージがはっきりとあったようです。文字どおり駆け出しの私は、ひたすら祭りのすごさ、特に全員が酔っぱらいで町中が



Fig. 2. 2. 12 縄文の御柱祭 2

大宴会、神出鬼没のラッパ部隊が家の屋根からラッパで応援というような野性的なハレの光景が、ただただ面白くて、忘れられない衝撃を受けていました。そこで見た迫力がそのまま出たようなこの絵は、本の見開きを飾りまして、今でも信州に行くと、「あああの御柱の絵を描いた人か～」と言われるほど、地元の研究家にも忘れがたいインパクトを与えたようです。

インパクトと言えば、縄文人が鮮明な姿を私に見せ始めるきっかけとなった画期的な体験が、京都の祇園の髪結いさん訪問です。小山先生が、なじみの芸者さんなどから紹介してもらったらしいベテランの髪結いさんで、我々が訪ねたときも二人の舞妓さんの髪を結いながらのインタビューでした。ミミズク土偶のレプリカと、鳥浜貝塚から出た赤い朱塗りの櫛の写真を見てもらって、ちょうど舞妓さんぐらいの縄文の娘さんはいったいどんな髪型をしてこの櫛をさしていたと思うか、と尋ねますと、「挿すところが長い深歯の櫛であつたら、アップ



Fig. 2. 2. 13 土偶と日本髪

プにあげた髪型でないと抜け落ちてしまうから、絶対髪はアップに結び上げていないと挿せません」ときっぱり言われました。そしてその場の生の舞妓さんの髪で、一見複雑に見えるけれどもとてもシンプルな日本髪の結い方を教えてくださいました。「縄をなう達人だった縄文人なら、そのくらいの髪を結うのは朝飯前だったはずですよ」と言われて、一同いたく納得しました。「私と先生のずっこけ取材記」、は後に『縄文探

検』というタイトルの本になっていますが、このエピソードは新しい縄文人像のスターティングポイントだったということで、巻頭を飾っております (Fig. 2.2.13)。

もう一つの、「行ってみた」例は、イノシシを取材するという名目で、丹波篠山にシシ鍋を食べにいったことです。これは楽しかったです。地元の肉屋さんでは、名産品としてイノシシ肉が普通に並び、大きな冷蔵庫に入れてもらっていると、解体前のイノシシがずらりと並んでいました。そのイノシシをスケッチして、復元イメージに加えました。

その後私は、縁があって、**ブナ林と狩人の会**という、年に一度のマタギの情報交換会にも出席させていただくようになりました。この会は、東北芸術工科大学の田口洋美先生が主催されています。秋田のマタギのおじさんが見せてくれた熊撃ちの話も復元画の参考になりました。

そもそもバックパッカーの私は、その後、家族ができて10年ほどは一緒にバリ島に通いました。そこで体験した事は、縄文時代の暮らしに思いを馳せる上では大変に役に立ちました。バリ島の暮らしには、自然を恐れ敬いながら共生していく人々の営みがたくさん残っています。賢く洗練された伝統文化に生きる島の人々と、オーガニックで合理的な衣服や建物のデザインからは、学ぶところが大いにあります。特に、バリで盛んなケチャなどのダンスは、シャーマニックな身体の動きや精神のトランスレーションを目撃する機会を私に与えてくれました。

私の子どもたちのふるさとでもあるイギリスとアイルランドは、偶然ながら縄文とよく似た遺跡と文様を持つケルトの土地でもありました。この国には、縄文の都である東北地方に共通した北国の原野と湿原の風景があります (Fig. 2.2.14)。またケルトの特徴でもある渦巻き文様には、ミステリアスな精霊の変身物語が隠されていて、そこから膨らむ古代人の精神世界のイメージは、この上なく豊かです。ユーラシア大陸の両端の国に残された二つの古代文明は、鉄

ブナ林と狩人の会 現・東北芸術工科大学教授の田口洋美氏によって立ち上げられた、広域山村交流会議。その趣旨は以下に詳しい。
URL: <http://matagi-summit.cocolog-nifty.com/blog/> (2017年2月5日にアクセス)

ケルト Celtsは古代ローマ人から北方のbarbarianと捉えられていた人々に対する名付けがもととなっているが、多様でとらえどころがない概念でもある。筆者が英国滞在中(2015年10月～2016年10月)に大英博物館で特別展

“Celts: Art and Identity”が開催されていた。Celts文化と捉えられる考古資料のみならず、前近代のrivalやreinventionの文脈でのCeltsイメージの展示や、現代におけるCelts identityに関する展示など、複数の視座からCeltの単一イメージを提示するのではなく、Celtsに対する様々な見方も展示する内容となっていた。

鶴岡真弓 (つるおか・まゆみ) 現・多摩美術大学芸術人類学研究所長。ケルトや日本美術に関する著作が多数ある。



Fig. 2. 2. 14 ケルトの風景



Fig. 2. 2. 15 ケルトの昔話

器と石器という大きな時代の隔たりを考慮しても、やはりずいぶんと似ていると、ケルト研究家の鶴岡真弓先生も言っておられます。巨大な石や木を運び、ストーンサークルやウッドサークルを作った人々は、どのような摂理に順じていたのでしょうか。ケルトの物語を聞いていると、その秘密がすこし見えてくるように思われるのです。Fig. 2.2.15 はイルカが変身して、漁師の妻になるという昔話からインスピレーションを得て描いた絵です。

次に、もう一つの方法、「作ってみる」という実験です。実験的なワークショップから生まれた縄文の衣服について、これからお話をします。

まず、遺跡からはアクセサリーが出土しています。すべて縄文人が作ったもので、その造形センスと技術の精密さには驚かされます。櫛はすでにお話ししましたが、千網谷戸遺跡出土のイヤリングは、何度スケッチしても驚嘆するすごいものです。前後左右だけでなく、立体的にも、手前から奥の空間までに、実に複雑なシンメトリーが成立しています。岡本太郎は、縄文の造形を「ハンターの空間センス」と表現していましたが、この造形だけを見ても、彼らの世界観

や思想が憶測できる気がします。山形県西ノ前遺跡出土の土偶は、モダンな姿をした土偶と言えます。ミニスカートにベルボトムのパンツ姿を思わせて、今表参道を歩いていてもまったく違和感のないファッションです。

千網谷戸遺跡出土のイヤリング 群馬県桐生市の縄文時代晩期の千網谷戸遺跡で多数出土した立体的な彫刻文様を特徴とするピアス形の耳飾。土肥孝氏によると、この耳飾は1998年にパリの日本文化会館で開催された“Jomon: l'Art du Japon Origines”展にも出品され同展示を観覧したク

ロード・レヴィ・ストロースに激賞されたとのことである（土肥 2011）。同展示図録に寄せられたクロード・レヴィ・ストロースの序文は港千尋の写真集『掌の縄文』（2012）にも収録されている。



Fig. 2. 2. 16 「縄文太郎」像

ああ、それなのに・・・、です。小山先生がよく言われる事ですが、私たちが新しいイメージを提案するまでは、このおじさんが縄文人のイメージだったのです (Fig. 2.2.16)。そんなはずはない！と言って興奮する小山先生をリーダーとして、民族考古学ワークショップは始まりました。

先生が見つけてきたもう一人のリーダーは、松本敏子という薫英女子大学の先生で、世界中の少数民族の衣装を研究されていました。西ノ前遺跡の土偶が着ていたドレスは、台湾の少数民族タイヤル族の民族衣装で説明ができるということで、松本先生ご指導の元、実際に作ってみました。

さて、このチームで一番初めに作った縄文ドレスは、赤いレザーのミニドレスでした。この服作り実験ワークショップは、縄文人の服は原始的な毛皮だという私のイメージを打ち破った画期的なものでした。まず、縄文ドレスの色は何色かという問いがありました。縄文人が頻繁に使った色と言えば、漆の黒と赤だなあ、ということで、「かぶれますよ～」とか言いながら、日本の着物や帯には漆で染めたものがたくさんあるんだから、やってみようということになりました。小山・松本両先生のワークショップは、たとえ1パーセントの可能性でも、ひらめくとやってみようということになります。そこで、縄文時代漆が盛んに使われた青森県の代表的な土偶、遮光器土偶を参考にドレスのデザインをすることになりました。文様は服を着た上から漆でペイントしよう、ということになりました。土偶をつぶさに観察して、少数民族の衣装に当てはめ、私がデザインして松本研究室で女子大生と共

岡本太郎（おかもと・たろう） 戦後日本における「縄文」の大衆化にもっとも大きな役割を果たした芸術家。美術誌『みづゑ』に発表した「四次元との対話：縄文土器論」（1952）がその始まりとされている。その後、『日本の伝統』（1956）で縄文時代の文化を日本文化の中に位置付けた。1930年代にはフランス・パリで活動していた。パリ時代にマルセル・モースの講義を聴講し、Musée de l'Homme（人間博物館）に通っていたことの影響は本人も各所で触れており、民族的素養が戦後の帰国後は日本各地のフィー

ルドワークを行い、いくつかの書籍（1958、1961、1964）を刊行したことに繋がっている。こうした背景も含めた岡本太郎評論としては樫木 2003、赤坂 2007 がある。

山形県西ノ前遺跡出土の土偶 最上郡舟形町の縄文時代中期・西ノ前遺跡から出土した土偶。高さ45cmの大型の土偶で、割れた状態で出土したが、欠損部があまりない状態に復元できた。2012年に国宝に指定された。「縄文の女神」と称されている。



Fig. 2.2.17 縄文服の復元 1



Fig. 2.2.18 縄文服の復元 2

同作業で作り、差し入れは豪華なお寿司という楽しくて発見のあるワークショップでした。ドレスの材料は、先ほどもご説明がありましたように、縄文人は動物の皮をたくさんもっていたはずだ、ということで鹿の革になりました。ここでの発見は、ドレスの形は革の形で決まるということでした。今でもマタギのおじさんたちは、鹿の脚の部分に腕を、腕の部分は自分の腕に巻いて使うそうですが、鹿革のウエストのくびれを若い娘のウエストにあわせると、すてきなボディコンシャスドレスになることがわかりました (Fig. 2.2.17)。Fig. 2.2.18 は実際に作ったドレスをモデルさんに着てもらって、大阪のど真ん中を歩いてもらったときの写真です。アクセサリもすべて復元した縄文時代の形ですが、とてもモダンなルックスで、今ならコスプレアイテムとして人気が出たかもしれません。

同じ方法で、北海道著保内野遺跡の国宝土偶、埼玉県真福寺貝塚のミミズク土偶の二つをカップルにして、時代はややずれますが漆塗りの出土品を持たせて縄文時代のクールなボーイアンドガールを復元イメージにしてみると、こうなります (Fig. 2.2.19)。Fig. 2.2.20 は実写バージョンです。男性の方はズボンははいているように見えますが、松本先生によると、ズボンを作るのは本当に難しい高度な技なので、多くの少数民族はもっとめんどくさい方法で、いくつものパーツに分かれた布を巻き付けて、下半身を隠していたという事です。折しも、アルプスで氷河期の男性ミイラが発見されて話題だったので、彼が身につけていたとされるガータースタイルの吊りズボンでいこうということになりました。なので、実は脚に巻いた革を腰のベルトから吊って、前と後ろは褌を上着で隠しただけなのです。女性の方は、三内丸山遺跡から出た板状土偶から再現したものです。

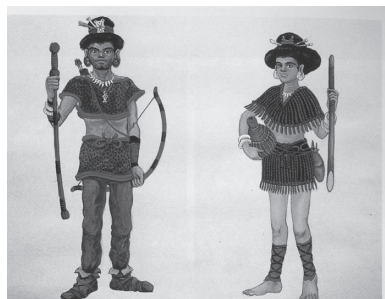


Fig. 2. 2. 19 縄文ボーイ&ガール 1



Fig. 2. 2. 20 縄文ボーイ&ガール 2



Fig. 2. 2. 21 縄文服の復元 3

Fig. 2.2.21 は作業風景です。実際に作業してみると、縄文人だったらどうしたんだろうか、と考えるようになってきます。すると松本先生が、どここのネイティブの人たちはこうしているだとか言って答えてくださいます。例えば、こんなに綺麗な服だったら儀礼用の服でしょうか、という、松本先生は「いやいや、あの人たちは畑仕事も晴れ着です。毎日最高の服を着ているの」と、目から鱗の話をしてくださいました。

女子大生と松本先生、助手の人たちが、そういう話をしながら手作業をしていると縄文時代の女性たちが井戸端会議をしながら娘の晴れ着を作っている光景と重なってきます。そんなときにこそ、おばあちゃんから孫へ、文様にまつわる言い伝えや父方母方それぞれの部族の伝説などが受け継がれていったのではないのでしょうか。

また、信州では、土器からも衣服のデザインをしました。Fig. 2.2.22 は浅間山麓で出た土器の文様をもとにした服です。この場合も、髪型や櫛、イヤリングまで、マニアックに復元しています。

また、堂ノ上遺跡のある飛騨の久々野町では、遺跡を囲む川から淡水性の真珠貝が採れるという事で、このようにキラキラ光って、歩くとシャラシャラ音のするドレスを考案しました。Fig. 2.2.23 は、ミス久々野がそれを着てポーズを決めてくれているところです。この場合も、肌触りのいいバックスキン



Fig. 2. 2. 22 浅間山麓の縄文ガール

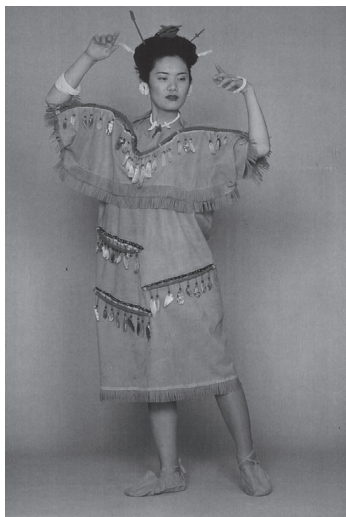


Fig. 2. 2. 23 ミス久々野

的な衣装を参考にして復元しています。

このようにして、裸だった縄文人たちは、ガッチリと服を着たのです。『縄文人の家族生活』の初版が発刊された頃は、考古学者は一斉になんじゃこりゃ、といった冷たいリアクションをしたものですが、不思議な事に今では、私たちには何の断りもなく普通に縄文人に赤と黒が基調の服を着せています。ということは、今ではほぼ全国的にこのイメージが受け入れられたと喜ぶべきでしょうか。

さて、具体的な話を終わって、ここでは考古学の復元イメージ全体を見渡しながら、考古学と一般の人々の間を取り持つインタープリターとして、復元イメージが果たす役割について、私なりの考察を述べてみたいと思います。

私の考えでは、復元イメージは「過去をのぞく窓」という表現ができると思います。今も昔も変わらない家族の営みに共感したり、未来を予測したりするための考古学の果実としての具体的な光景を、現代人はこの窓を通して見る事ができます。変わらない事や、すっかり変わってしまった事、未来を託す子どもたちに何を受け継いでいくのか、といったことにまで考えを巡らせる風景を、その窓から見ることはいかなる事ではないのでしょうか。

過去から現在までを見渡して、人間は同じようなものに夢中になるなあ、という例を、この窓から見てみると、例えば縄文時代の

何の断りもなく普通に縄文人に赤と黒が基調の服を着せています 2005年に新潟県立歴史博物館で開催された「水辺と森と縄文人」展、国立科学

博物館で開催された「縄文 VS 弥生」展が例としてあげられている。



Fig. 2.2.24 民族音楽ワークショップ

と続いているという事、それはデジタルの時代になっても、同じような現象としてあることがみえてきます。ボーカロイド・初音ミクは、拡張現実と呼ばれる現実と仮想空間の間に存在する3D映像のアイドルですが、縄文時代の精霊たちが住んでいた世界も、縄文人にとっての拡張現実であったはずです。初音ミクのライブコンサートの、このような陶酔は、縄文時代にも通じ

るという事が見えてきます。

最後に、考古学に関わるアーティストとして、考古学と一般の人々の間を取り持つインタープリターの役割を私はどう果たしていきたいか、ということをお話しします。より多く、様々な人に、考古学からインスピレーションを受け取ってもらうために、どのようなことができるのかという事例と展望を述べてみたいと思います。

その一としては、遺跡に集う事を挙げています。私も一員でありますNPOの市民団体が、アーティストや研究者とともに土地の人々と遺跡に集う事で、考古学と一般人との接点を広げていった例です。これは、NPO 三内丸山縄文発信の会が20年近く続けている遺跡イベントの一コマです。縄文時代の公民館であったと推測される復元大型住居の中での民族音楽ワークショップの様子です (Fig. 2.2.24)。この団体は、三内丸山遺跡の発見された年に発足して、以来毎年満月の夜に三内丸山遺跡に集まる縄文月見の宴を開催してきました。私も毎年参加して、復元大型住居の中でファミリーワークショップをしています。NPOなのであまり資金がないですから、限られた予算でできる事を毎年考えて、縄文時代の空間で家族が物作りを楽しむ体験を提供しています。ゲストには、海外の研究者や音楽家なども招きます。津軽三味線の名人による演奏は、贅沢にも毎年必ずあります。また、祭りの最後には縄文レシピの料理が並ぶ大宴会、縄文バンケットも開催されます。NPO 縄文発信の会は、発足からずっと毎年、20年に渡って毎月、遺跡と発掘調査の情報誌「縄文ファイル」を日英対訳で発刊し続けています。

その二としては、こちらが出向いて行って様々な人に縄文時代の知識を配達するという事もしています。自分から足を運ぶほど興味はない、言うなればまったく興味のない人たちに、考古学との出会いを体験してもらうためには、出前ワークショップはとても有効です。大阪の古本屋さん兼カフェバーで14年ほど毎年、縄文サロンを開いています。縄文時代的话题を肴にしてビールを飲む



Fig. 2. 2. 25 ユニバーサル・ミュージアム研究会



Fig. 2. 2. 26 現代の土偶 1



Fig. 2. 2. 27 現代の土偶 2

会です。このバーでは、週末にジャズライブがあるので、メンバーでジャズを演奏する土偶を作ってみました。また、民博では、縄文のファミリーワークショップをすることもありました。博物館の収蔵庫から埋もれていた資料を発掘して、展示もしています。Fig. 2.2.25 は、視覚障害のある人の研究会で三内丸山遺跡調査室を訪れたときの写真です。この人たちは、見るのではなく触って情報を得ます。収蔵庫の土器や土偶を片っ端から触らせてもらって、文字通り皮膚感覚でそれらを把握する人たちとのワークショップは、新鮮な発見でいっぱいです。小学校にもでかけていきます。図工の時間に、パワーポイントスライドと復元イメージで出土品や遺跡の説明をして、土器や土偶と一緒に作る、ということもします。小学生たちに、縄文時代の解説をするときほど、復元イメージを仕事にしていたよかったなあと思う事はありません。彼らの驚きや好奇心が輝くのを見るときは、本当に幸せを感じます。その結果として、このような傑作が生まれます (Fig. 2.2.26)。縄文の土偶には似ていますが、現在のゲームキャ

ラクターにカスタマイズされている所がすごいと思います。また、縄文の母子の土偶を見せた所、このような、お母さんと私と赤ちゃんという土偶も作ってくれました (Fig. 2.2.27)。

最後に、インスピレーションが最も大切にされる分野、アートと考古学を関係付けて研究するアートアンドアーケオロジという考古学の裾野の広がりについて、私なりの展望をお話して今日のプレゼンテーションを終わりにしたいと思います。

大英博物館での土偶展の翌年、同じく英国のイーストアングリア大学のセイ

ンズベリー視覚芸術センターで意欲的なアートアンドアーケオロジの試み、UNEARTHED という展覧会が開催されました。おかげさまで私も、参加をさせていただきましたが、学芸員としての研究者が、モダンアートと考古学とを関係付けて研究対象にするということが、アートアンドアーケオロジのスタンダードな姿かなと思っています。そういう研究者目線の取り組みに対して、アーティスト側の展望として私が注目しているのは、ここ数年、特に震災以降は日本中に広がっているムーブメントで、村おこしや観光と結びついた町ぐるみのアートショーとそれが持つ意味です。これはヴェネチアやヨーロッパなどではすでに歴史の古い物ですが、日本ではここ最近とみに大きくなってきました。瀬戸内アートトリエンナーレは、中でも歴史が古くて有名です。ちょうど去年開催だったので私も出かけましたが、実際に現場に行ってみて、これは本当に意味のあるアートのあり方だなあ、と大いに感銘を受けました。

ここでは群馬県の小さな山間の町、中之条町が主催している、中之条アートビエンナーレで去年私が出会った作品を数例紹介します。村の地主の家の屋根裏で、養蚕のための蚕を飼っていた大きな空間の中で、イギリスから来た「廃墟アーティスト」が、部屋にたまった埃を毎日一回ずつ拭きとって、その雑巾を洗った水に和紙を浸けて、毎日綺麗になっていく水の色を展示していました。和紙に汚れの線が入っていて、だんだんこれが見えなくなっていくという事がわかります。こういう形で彼女は、この家に堆積した年月を展示したとも言えます。窓にも、埃を拭き取った部分と拭わなかった部分が絵画的に構成されています。これは実に考古学的なインスピレーションに満ちたアート作品だと、私は思います。

廃屋になった家の窓辺で見つけた虫の死骸を瓶に入れた作品では、カブトムシや、カナブンなどが入っています。大きな庄屋さんのものすごい部屋数の屋敷の、部屋という部屋から電気を取り外して並べた作品、台所で放置されていたさまざまな日用品を綺麗に洗って天井からぶら下げた作品もありました。

住む人がおばあさん一人になってしまった古い家にある蔵の二階も会場になっていました。おばあさんは、「もう自分には整理できないし、いらないから」と言って、蔵を処分するつもりです。ここを制作の場を選んだ若いアーティスト

イーストアングリア大学のセインズベリー視覚芸術センター Sainsbury Centre for Visual Arts
建築はロンドン市内の「ガーキンビル」や「ミレニウム・ブリッジ」で知られるノーマン・フォスターの初期の作品で、映画「アベンジャーズ：エイジ・オブ・ウルトロン」（2015年）ではアベンジャーズの基地として登場した。

UNEARTHED 2009年の大英博物館での
“The Poer of DOGU: Ceramic Figures from Ancient Japan” (Kaner ed. 2009) に続いて、2010年にセインズベリー日本藝術研究所の企画で開催された (Bailey, Cochrane, and Zambelli eds. 2010)。

トは、何週間もこの蔵にこもって、蔵の中にしまわれていた物を全て並べ直して、いろいろな形のオマージュを作り、再び蔵の中に展示しました。彼はおばあさんから、ひとつひとつの品についての思い出話を聞いたそうです。金工細工デザイナーである彼はそうして、おばあちゃんが少女の時代、もてなしに使われていた宴会セットを、蔵の二階に畳を敷いて並べ、そこに金細工の花を咲かせました。

廃校になった小学校の講堂に窓を並べた作品もありました。教室の窓、廊下の窓、近くに在ったお店の窓、村一番の旅館の窓。その窓ひとつひとつにはセピア色の昔の中之条村の子どもや人々の写真が映写されていました。

村から忘れ去られる思いや小さな日常の品々をアーティストが拾い上げて、自分の感性によって作品として、再び村の人や私たちに見せてくれる。これらのムーブメントには、村の風土や記憶を再発見するという、誰にとっても意味があり、必然性がある大切なコンセプトが隠されていると思います。昭和や大正時代の中之条の家族にあった思い出がアーティストによって掘り起こされ、新しい姿に復元されて普遍性のある作品に姿を変えます。それは縄文の家族が私たちの中で再び息を吹き返すという、大いなる考古学的インスピレーションにも通じている気がします。